

燉煌石室五種佛典の解説

妻 木 直 良

佛のペリオ氏が一昨年、燉煌鳴沙山石室より約五千卷の古寫本を得來れりと云ふ事は我國の新聞紙にも傳へられ、燉煌石室の名、大に世人を驚かしたりしが、其の後その一部を上木し、北京の羅振玉氏之を考證して『敦煌石室遺書』と題し、世に流布せられ、慧超の『五天竺國記』及び『老子化胡經』の如きは、學者をして其の無價の寶たるに驚嘆せしめたり。而して昨年其の殘部約六千餘卷の古書は、悉く北京の學部に移送せらるゝこととなり、一々その目錄を調製して整理に従事しつゝありと聞きしが、我が京都大學の教授諸氏が昨夏その調査に赴き、約六百卷を見るを得て、其一部を撮影して歸朝し、多くは佛書にして其中逸經及び古寫の善本に富むことは松本博士の論文〔藝文〕〔五二ノ六〕に依て之を發表せられたり。予輩また偶然にも同所より出て汪大燮氏の所有にかゝる五種の卷子本を見ることを得たりしが、五種何れも佛敎の經典にしてまさに佛敎經典の本文批評及び佛敎歴史の研究材料として希觀の珍品と

稱するに足るものあり。いま白鳥博士の勸告に従ひ、聊か解説を試むることゝせり。而して燉煌石室の地理及び古書等に關し、今日までその研究を發表せられたる題目を左に掲出し、研究者の參考に資すべし。

(書目及び題名)

(編者及び筆者)

(出版年月)

(西 紀)

燉煌石室遺書四卷

羅振玉氏

宣統元年

(一九〇九年)

慧超往五天竺傳

藤田豐八氏

明治四十三年

(一九一〇年)

北支那旅行概報(地學雜誌二六六號)

小川琢治氏

明治四十四年

(一九一一年)

燉煌石室古寫經の研究(藝文三ノ五六)

松本文三郎氏

明治四十四年

(一九一一年)

波斯經殘片(國學叢刊第二號)

羅振玉氏

宣統三年

(一九一一年)

一 五種の卷子本古寫經

予輩は先づ滿鐵會社調査部に於て是の五種の卷子本を見たりし際、その卷子本の幅及び長さを測りたるに左の如し。

經論の名

殘存の長さ(横)

幅(縦)

一張字數

(一) 賢愚經	二二尺六寸五分	八寸一分	十七字廿八行
(二) 大智度論	三三尺八寸二分	八寸三分	約十七字廿八行
(三) 大通方廣經	三一尺一寸五分	八寸四分	約十八字廿七行
(四) 法華經玄贊義釋	六〇尺五寸	九寸四分	二十七字廿八行

(五)大方廣十輪經

二一尺九寸五分

七寸五分

約十七字廿八行

右の中、最も完全に存せるは大方廣十輪經と大通方廣經なり、是れとて全部存せるにはあ
らざれども、十輪經八卷の中、第一卷序品は全部存せり、また大通方廣經は逸經なれば幾卷の
ものなるか今知るに由なけれども、今存せるものは首尾に左の題號あり。

大通方廣懺悔滅罪莊嚴成佛經

(首)

大通方廣經卷上

(尾)

是に依て案すれば、上下二卷か、上中下三卷の者かなるに相違なし、たとひ全部なくとも、一
卷丈けが完全に存せる故、その内容を推知し得べし。また賢愚經は、その經名なしと雖も、中
に、

大光明王品第十六(塗抹して二十八
と改め居れり。八)

優波斯那優婆夷品第十七(同じく廿
九と改む)(寫眞を
見よ)

といへる品名の記載ある故、之を探りて現藏經中に存する宋本の賢愚經と其品次を同じく
するを知り、其文を對校して、今存するものは、鋸陀身施品第十五の終りと、及び前記二品の全
文なること分明となれり。『大智度論』は終りに大智度論卷三とあるゆへ、之を縮刷藏經(弘教
書院)
本(往秩第一冊の大智度初品中住王舍城釋論第五(卷第
三))とあるに對校し、同じく第三卷の文に
して、この卷中始め約一枚(弘教本の一枚に
約一千四百字)を缺きたるのみにて、他は第三卷完全に存せり。

五種の中、最も長きは法華經立贊義釋にて、是は首尾全からざる故、如何なる佛教なるか明

らかならざりしが考究の結果、慈恩大師（名は基、玄奘三藏の開祖）の著せる法華經疏たる『玄贊』を解釋せること明らかとなり、假りに上記の名を與へたり。現存せざれば何人の著述なるかは不明なれど、樸陽大師（慈恩の資たる滿州大師の高足）の著述にかゝる現存の『法華經玄贊攝釋』に比較し、更に詳密にして該博なる識見に富むものゝ如し。書牀の草書にして健腕直筆の妙を極むると俱に佛典註解書中の典型と稱すべきものなり。以下少しく是等石室零存の五種經典につき、いかなる内容を有し、いかなる特色を持てるかを解説すべし。

二 賢愚經

是の『賢愚經』は其題目を見ても普通の經典と同じからずして、支那選述の名目に親しきを感じしむるものなるが、梁代僧祐法師の撰せる賢愚經記（僧祐の『出三藏記集』第九卷）に依れば、河西の沙門釋曇學、威徳等が于闐國（Khotan）にて聞き得たる所を筆録し、高昌（Kao-chang）に還りて之を撰集したる者にて、其の題目も釋慧朗なる人が之を命名したることを記せり。されば之を稱して小乘經典と稱するよりも、西方賢人の撰集として小乗部以外に置きたる『開元目錄』（智昇、唐開元十八年撰定）の判定最も當を得たるものと云ふべく、其性質より云へば『雜寶藏經』撰集百緣經等と同じく佛陀の本生譚（Jataka）なり。是經は弘教本藏經にては宿帙第九冊に收められ、元魏涼州沙門慧覺等在高昌譯と記され、十三卷あり。僧祐の記に依れば正に宋朝元嘉二十二年（西紀四年）に撰集せられたるが如し。而して是の經典につきて最も注意すべきことは、品次卷數等を異にせる多種類の經本を存せることにて、今日迄に世に傳はれるもの左の

如し。

(1) 契丹本

(弘教本賢愚經中に唯だ其品目を注せるものを存す)

(2) 高麗本

(弘教本藏經の原本)

(3) 宋本

(現存す、弘教本は之を對校す)

(4) 元本

(同上)

(5) 明本

(同上)

(6) 西藏本

(高楠博士の *Tales of the wise man and the fool* に依る。西紀千九百〇一年七月 *The Royal Asiatic Society* 掲載)

(7) 蒙古本

(同上)

右の外に今回得たる燉煌石室本を加れば正に入種の異本を得る次第なるが、前記の中、契丹本と云ふは、契丹道宗の時代(西紀一〇五七—一八四年頃)に彫刻せる大藏經に收めたるものにて、今日所謂契丹本の原本は一冊も未だ發見せられざれども、その刻本のありしことは他の書籍及び金石文にて證明し得べし。(予は近日その説(を發表すべし)高麗大藏の再刻(西紀一二五—一三〇年刻成)を計る時、校訂者守其法師が契丹本に依りて其大部分を修正せること、『高麗新彫大藏校正別錄』に記せるが如し。而もその契丹本の形式を傳ふること、この賢愚經の如く詳かなるは他に類を見ざる所にして、また是經の異本多き一證とすべく、弘教本印成の際、別に品目對照表(高麗本と明本)を作りてその卷首に掲げ居るにて其差異の著しきを知り得べし。而して上記七種の中、宋元明三本は大體に於て相同じく、西藏本と蒙古本とまた相同じきより、之を總括して四種類と稱し

得べし。即ち其の四種類といふのは、第一に品數の等しきや否やを調査し、第二に是の燉煌本に存せる大光明王品と優婆斯那品との具缺を調査し、之を分類せるものにてその表左の如し。

- | | | |
|-----------------------------------|------|-------------|
| (本名) | (品數) | (二品具缺) |
| (一) 契丹本 | 六九 | 二品缺。 |
| (二) 高麗本 | 六二 | 光明王品缺、優婆品具。 |
| (三) 支那本 <small>(宋、元、明)</small> | 六九 | 二品具。 |
| (四) 西藏本 <small>(此中、蒙本を含む)</small> | 五一 | 二品缺。 |

次に是の燉煌本に收めたる第十五、第十六、第十七の三品を標準とし、聊か四本の品目(第十五、第十六、第十七)を列擧すれば左の如し。

(麗本)	(宋本)	(丹本)	(西藏本)
鋸陀身施品第十五 <small>(卷三)</small>	同	品第十五 <small>(卷三)</small>	出家功德戶利菴提品第十五
微妙比丘尼品第十六 <small>(同)</small>	大光明王始發道心緣品第十六 <small>(同)</small>	(無)	沙彌守戒自殺緣品第十六
阿輪迦施土品第十七 <small>(同)</small>	摩訶斯那優婆夷品十七 <small>(同)</small>	阿輪迦施土品第十七 <small>(同)</small>	長者無耳目舌緣品第十七
七瓶金施品第十八 <small>(同)</small>	出家功德戶利菴提緣品十八 <small>(卷四)</small>	大劫貧寧品第十八 <small>(卷四)</small>	貧人夫婦施得現報品十八
差摩現報品第十九 <small>(同)</small>	沙彌守戒自殺品第十九 <small>(同)</small>	微妙比丘尼品第十九 <small>(同)</small>	迦騰延敬老母賣貧緣十九
貧女難陀品第二十 <small>(同)</small>	長者無耳目舌緣品第二十 <small>(同)</small>	梨耆彌七子品第二十 <small>(同)</small>	金人緣品第二十
摩訶斯那優婆夷品第二十一 <small>(卷四)</small>	貧人夫婦施得現報緣二十一 <small>(同)</small>	設頭羅健寧品第二十一 <small>(同)</small>	重姓緣品第二十一

以上四種の原本の中、西藏本(蒙古本も大體に於て同じ)は、支那本より譯して其品數を減ぜしものなることは高楠博士の證明せる如し。然るに漢譯の中に就て、宋、元、明の三本は、すべての形式を同じくせる故先づ大體に於て同一のものと認定し、假りに之を支那本と稱し。この支那本と契丹本と高麗本と三種の中今の燉煌本は、何種の本に似るやと云に、前表の如く、

光明王品第十六

優婆斯那優婆夷品第十七

とある品目及び其の順序がすべて宋本と一致し、丹本、麗本とは全く異なること一目瞭然たり。麗本は優婆斯那品丈け存すれども之を第廿一品の位置に置き、丹本は全然二品の本文を存せざること守其法師の註に依て之を知るを得べし。而して是の燉煌本と宋本とにつきて一々文字の異同を校するに、内容の大體は殆んど一字一句も相違せざるほど符合すと雖も、題目の書き方に繁簡の別あり。首尾の文句に増減ありて、燉煌本が最も古式を存して元魏代原本の面影を留むることを推察せしむ。即ち燉煌本が光明王品と簡單に題せるに對し、宋本は大明光王始發道心緣品とあり。又た宋本が一品々々の首尾に普通一般の經典に存する常例の

如是我聞一時佛在某國某處等(首)及び頂戴奉行(結)

と云へる首尾の文字を安置せるに對し、少しも經典類似の常例の文句なく、始めより終り迄、但だ物語の編集と云へる躰裁を持ちたるは、其筆寫せる文字の悉く唐代以上の古態を留め

たると俱に、最も上代に成れる寫經たることを示すものなり。而して是の熾煌本が品目の上を塗抹して廿八、廿九と改めたるは、(寫眞)現存の何種の本とも其の順次を同じくせず。殊に最後に卷第七とあるは前表四本對校の卷數に比し何れも一致せず、想ふに是の卷第七とあるは熾煌本の最後に別種の零紙を取り合せたるものにて必ずしも是品目の卷數に非ることは、紙質の全く異なるを以て推定し得べし。但だ其の品目を書き改めたるは、當時(石室以前即ち西紀一〇三七年前)俗間に多くの異本行はれ、其等と一致せんために當時の人が妄に改めたるものならんか。是の零殘本のみを以て其の理由を斷定すること難し。

更に考ふるに弘教本藏經に收められたる高麗本賢愚經には、光明王品(熾煌本と同一の)なしと雖も、第十卷中に大光明始發無上心品第四十二あり。その内容は光明王品と同一なれど、文辭甚だ簡單なり、又た宋本には二品俱に存すと雖も、是の麗本の第四十二品に當るべき大光明品なし。(増上寺宋本に無しと註せらる縮藏宿軟九册三丁)是を以て之を見れば、是の零殘熾煌本は正しく増上寺宋本の原本たりと稱すべく、丹本麗本の中間に立ち、最も完全せる形式を示せるものと云ふべく、是の形式にして愈々最古の元魏譯に近きものとせば、賢愚經につきて最も完全なるは、丹本麗本よりも時代の新らしき宋刻大藏(増上寺本)の賢愚經なりと斷定するを得べし。

二 大智度論

今茲處に列擧したる五種の經典中、教義上よりするも、歷史上よりするも、最も重要な地位を占るものは是の大智度論なり。是の書は本と『大品般若經』を註解せんため、印度大乘佛

教の始祖として有名なる龍樹大士の造られたる論なるが、單に註解書として價値あるのみならず、西紀二世紀頃に於ける印度佛教の狀態、及び當時の社會狀態より惹て其當時いかなる經典が存在せしか、將た又た當時の佛教徒は釋迦佛の傳記をいかに解釋し居りしか等の事實を探るに唯一の材料となるものにて、名は註解書とあれど、その實、龍樹の學力識力を傾注して作成したる唯一の著述なり。されば佛教徒は之を大乘通申論と稱して大乘佛教の概論なりと稱し來りしが、他の一面より見れば、西紀後二世紀頃の印度の文明を反射したる一大叢書と稱すべし。今日現存せるものは麗、宋、元、明の四藏本何れも大鉢に於て同種類のものなれど、丹本と對校して刻成せられたる麗本最も完全なるが如し。是の翻譯は羅什三藏、姚秦の弘始三年より同七年迄の間(西紀四〇〇年)に翻譯せられたり(俗語の『出三藏記集』と傳)へらる。

予が前に現存四藏の中麗本最も完全なりと稱する理由は、弘教本(往鉄以下)の「大智度論を披けば明らかなる所にて高麗にて再刻の際、脱文ありしを契丹本に照して之を補ひたることは、當時の校正者たる守其法師の『校正別錄』に記す所なり。」(弘教本結鉄九册、四十五丁以下を見よ)而して三本を通じて同一なる點は、左の二點に在り。

(一) 品目の順序を記入すること。

(二) 經文と論文との區別を明にせん爲め、經文の上に「經」字を、論文の上に「論」字を冠すること。
麗、宋、元、明の四本皆然るのみならず、丹本と雖も恐らく同一の形式にてありしならん。然

るに燉煌本の『大智度論』は全く是の二點を存せず、最も素朴なる古式に依れり、即ち零存の卷三中、麗本等の智論には、

大智度共摩訶比丘僧釋論第六（弘教本往軌第一册二十五丁）

大智度初品中四衆義釋論第七（弘教本往軌第一册二十八丁）

と云へる品目を記入しあれど、燉煌本は全くその記入なく、第三卷を終る迄は、すべて一連に文字を記せり。又た麗本には

〔經〕共摩訶比丘僧〔論〕共名一處一時一心一戒（下略）

等とあれど、燉煌本には、單に

共摩訶比丘僧者共名一處一時一心一戒（下略）

と記するのみ。是の如く品目を作成し、或は經論の文字を加へて、其區別を明了にし、讀者の便利を計ることは、儒學の五經註疏の類が、宋代に到りて本文と註文とを會合し、或は區別を明了にすることを計られたる如く、何れも後代の發達を示すものにて、原本の時代を去ることに甚だ遠きを示すものなり。想ふに『開元目錄』（開元十八年西紀七三〇）出で、より千字文にて函號を記し、經論讀誦の便利を計りし故、是の後に至りて、すべての經疏にも、經文と疏文とを區別する便利法が考へ出されしものなるが如し。されば是の一條より論ずるも、是の燉煌本は正に西紀七三〇年以前の寫經に屬すべきものなり。

さて是の零殘燉煌本を以て、麗本等の智論に對校するに、現存の智論は、何れも脱文、誤寫多

くして翻譯當時の原文を去ること甚だ遠く殆んど意味を成さざる箇處とあるを發見せり。今その一二の例を掲れば左の如し。(括弧内の文字は熾煌本に依る。括弧外の文は二本同じ)

問曰已知耆闍崛山義佛善慈一切何以故獨住王舍城(往映一ウ二十三終行)

佛出世間正爲欲度衆生著涅槃境界安隱樂處是故多住舍婆提不多住迦毘羅婆(多住王舍城亦如是。復次王舍城國名覺伽陁佛於此國界伽耶城。以上二十六字麗本等皆脫。而有佛於摩伽陀國六字。)尼連禪河側澗

樓頻螺聚落(善提樹林中)得阿耨多羅三菩提。(往映一ウ初三丁)

歡喜已於耆闍崛山頭與衣鉢俱(直入山内)(麗本無是四字而有作是二字)願言令我身不壞彌勒成佛云々(往映一三四ウ)

以上の諸文若し括弧内の文字を加へざれば殆んど文を成さずと云ふべし。而して最も驚くべきは、現存麗本等何れも原本を改竄せる形迹あることなり。そは麗本(往映一オ二六行)に

我年一十九 出家學佛道 我出家已來 已過五十歲

とある頌文を、宋本元本明本は何れも

我始年十九(以下の句は同じ)

と記せること弘教本對校者が冠注を加へ居れり。然るに熾煌本を見るに、寫真にて縮寫し出せる如く、明瞭に

我年二十九

とあり。抑も釋尊出家の年代に關し、南北その傳を異にし、南方波利語經典所傳が何れも二十九歲出家說に一致せるに反し、北方所傳には、種々の說あり、『法華文句記』には二十五歲出家說を並記し、『梵網經』には七歲出家說を出せども、最も多きは十九歲說と二十九歲說とにして、『佛祖統記』に出せる所を見るに、二說を掲げたる經論の名左の如し。

十九歲說 瑞應經、因果經、中本起經、大智度論。

二十九歲說 十二遊經、增一阿含等四阿含經、出曜經、和須密論。

而して『佛祖統記』は其宗の祖師たる荆溪(文句記の作者、西紀七八二年寂)の說を取りて、二十五歲出家說を用れども、支那佛敎家の用ゆる所は、すべて十九歲出家說にして古來我國に用ひ來れる所も亦是說に依れり。即ち梁代僧祐(西紀五一〇年頃)の『釋迦譜』を始め、唐法琳(西紀六二六年)の『辯正論』、智昇(西紀七三〇年頃)の『續佛道論衡』すべて十九歲說なり。睿智非凡の人たるを顯し、道敎等の敎祖に勝れたることを示すには、二十九歲出家は餘りに遅し。十九の青年時代に出家したることは、いかにも生知の聖たるを示すに適せり、是れ一般に十九歲說を襲用するに至りし原因ならん。さば、『大智度論』の文も、始は熾煌本の如く、『我年二十九とありしを、麗本には二を誤りて一とせか、或は故意に改めたるか、何れにもせよ、一十九は二十九の誤りなり。然るに宋本に到ては全然その文字を改めて我始年十九と記し、始の一字を加へ、元本明本皆この改竄を襲踏せり。元來是の『智論』第三卷の頌文は、『須跋陀梵志經』を引用せるものなることは、文中に自から記せる所たり、而して『須跋陀梵志經』といへる經名は今の『大藏經』中に存せざれど、其の全文は、

『長阿含經』中の遊行經と同一にて、他に別譯せられて『佛般泥洹經』西晉白法祖譯又は『大般涅槃經』(東晉代法顯三藏譯)或は『般泥洹經』(人名譯)と云へる者と同種の經本にて、波利語の原本も存在せり。而して事實は同じきことを記せるものなれど、白法祖の譯と失譯人名の二經とは是の頌文に當る文句を缺き、『長阿含』と法顯の『般泥洹經』とは、左の如き文あり。

我年二十九 出家求善道 須跋我成佛 今已五十年 戒定智慧行 獨處而思惟
今說法之要 此外無沙門 (長阿含經卷四長帙九一二)

須跋陀羅、我年二十有九、出家學道、三十有六、於菩提樹下、思入聖道、究竟源底、成阿耨多羅三菩提、得一切種智、即往波羅捺國鹿野苑中仙人住所云々

(大般涅槃經卷下、長十三丁ウ三)

是の二文に對照せん爲め、『大智度論』第三卷の文を出せば左の如し。

我年二十九 出家學佛道 我出家以來 已過五十歲 淨戒禪智慧 外道無一分

少分尙無有 何況一切智

(右は燉煌本大智度論に依る、初一句以外は宋元明諸本皆同じ)

右の諸文を對照すれば、二十九歲出家説は、『大智度論』著者たる龍樹大士が之を承認して引用せること確實にして、麗、宋、元、明諸本の誤りたることは燎として白日の如し。而も龍樹大士當時に『須跋陀梵志經』として傳へられたるものは、今の『長阿含經』遊行經と同一にして現存波利文經典と大躰に於て一致せることを認定すべく、佛陀傳記に於ても二十九歲出家説がいよいよ有力なることを承認せざるべからずと云ふべし。若し是の燉煌本『大智度論』の他

の卷子が存在して、現存諸藏本と校正するを得ば、諸種の新事實を發見し舊來の迷説を打破すること少なからざるべし。予等は此の零殘の『智論第三卷』を以て最も珍重すべき古正典にして、羅什譯の時代を去ること甚だ遠からざるの寫經たるを信ず。

三 大通方廣經

是經は首題に大通方廣懺悔滅罪莊嚴成佛經とあるに依り、大乘方等部に屬する經にして、而も大通の名は、『法華經』に出てたる大通智勝佛、十六王子等の因縁談と關係あるを示し、過去佛を列する中に、最初の二萬日月燈明佛、三萬然燈佛に次て南無大通智勝佛、南无十六王子佛などの名あるを見ても、法華經信仰と關係あるを認めらるゝものなるが更に、除去二乘者、唯一乘在等の文字あるを見ても、教義上、同一部類に屬すること明らかなり。而して懺悔滅罪の爲め佛名を稱ふることを勸むるが斯經の主義なるゆへ、予は是經を以て法華經信仰の中より生れたる懺悔稱名主義の偽經ならんと判定す。その偽經と認むる理由は、始めに十七菩薩を列する中に龍樹菩薩あり、又過去佛百七十佛（首に二萬日月燈明佛）を列する中に、無量壽佛及び十二光佛、阿彌陀佛十二名あるに拘らず、現在佛九十一佛（首に釋迦佛）を列する中にも阿彌陀佛（無量壽佛の梵名）あり、後に未來佛四十佛（首に彌勒佛）を列し終り、三百〇一の菩薩名を列舉せる中、彌勒菩薩と慈氏菩薩（彌勒の譯名）とを並列し、あまつさへ曇無竭菩薩（由三藏記集に傳あり、北方幽州の西紀四二〇年頃印度に入る）と云へる北魏時代の人名をさへ列舉せり、以てその小智小才の者が巧智を弄して作成したることを推斷し得べし。されど是等と同型に屬する『佛名經』十二卷（開元錄卷十八、續映五四）

が開元年中(西紀七三〇年頃)既に世に行はれ、近代の所集に似たりとて偽經錄中に收め、守其法師の『校正錄』にも偽妄なること明らかなれど、時俗盛んに奉行する故、遽かに除き難しとして正經中に編入せるを見れば、唐開元年代より燉煌初め北地に流傳し、高麗地方、東北一帯に是の種の信仰に包まれ居れることを察し得べく、是の『大通經』も同種にして唐代北地に於て編成せられたるものなるべし。

四 法華經玄贊義釋

この本現存せざれば、著者不明なれど、文中に

自佛法東流來九百餘年、所翻譯經論、惣有七種。

といへる文あるゆへ、宋初の著作なること明らかなり。佛法東流の年代は、『開元錄』にも

自後漢孝明皇帝永平十年歲次丁卯至大唐神武皇帝開元十八年庚午之歲、凡六百九十四年。とありて、後漢明帝の永平十年を以て東流の紀元とすること一般に用ひらるゝ説なり。唐

初法琳法師が上殿下破邪論啓(武德五年、西紀六二二年)にも、

教流漢土、六百許年

とあり。永平十年を起點として計れば、開元十八年は、六百七十四年(前文ノ九は七の誤植若くは誤寫)に當り、武德五年は正に五百七十四年にして未だ六百年に滿たず、宋太祖乾德四年(即位七年)が正に九百年に當れり、今の文に九百餘年とある故、まさに宋太祖太宗が佛教の興隆を計りて譯場を設け、名僧學者を羅致したる時、法相宗の碩學が其の學才を傾けて是の註解書を作りしものト

るべく、譯語譯文につきては甚だ精通し居りたることを判定せらる。是の卷子は管に教義上のみならず草書體が弘法大師の三十帖策子の筆法と一致せるより、全く唐代の書法を傳へたる珍書として尊重せらるべし。

五 大方廣十輪經

弘教本玄奘七冊に、大乘大集地藏十輪經十卷(玄奘譯)大方廣十輪經八卷(失譯人名、今附北涼錄)二種の譯本を收めむ。是の燉煌本は北涼譯の『十輪經』と全く同じ。但だその首題が、弘教本(即ち麿本なり)に、大方廣十輪經卷第一と記し、更に行を改めて序品第一とあるに對し、是の燉煌本は佛說大方廣十輪經序品第一とあるに依り、宋元明諸本が、佛說の二字を加ふると同型にして現存宋本の底本と同一たることを推察せしむ。

嗚呼燉煌石室の發見は、正に我が正倉院に十百倍したる寶庫の現出に相當せり。若しベリオ氏及び北京學部の古書を觀見するを得ば、各種の方面に於て諸種の新事實を發明するに至るべし。今は但だこの五種の佛典を解説して大方の指教を仰ぐのみ。(完)